

令和元年6月13日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H03165

研究課題名(和文) 真言密教寺院の史料調査に基づく分野横断的综合研究 新たな仏教思想史の枠組を求めて

研究課題名(英文) Interdisciplinary research based on investigations of historical sources in Shingon Esoteric Buddhism temples-in pursuit of a new framework of Buddhism ideological history

研究代表者

上島 享(UEJIMA, SUSUMU)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：60285244

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、真言密教の拠点寺院における史料調査を基盤とした着実な実証研究を踏まえて、諸分野の研究者による総合的研究を進め、新たな仏教史像の構築を目指すことにある。成果は次の3点である。(1)拠点寺院の史料調査を行い、未調査の史料群については悉皆目録を作成した。2017年に勸修寺文書が国の重要文化財に指定されたことは、本研究の顕著な成果のひとつである。(2)密教修法が行われた儀礼空間を中心に、思想・建築・美術・文学・政治・社会経済・歴史が交差する様子を具体的に考察して、今後の仏教史研究の方向性を示した。(3)本研究の成果を取り込み、真言密教研究を体系化した書籍を刊行する準備ができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「研究成果の概要」を踏まえて、その意義を記す。(1)史料一点ずつの悉皆目録の作成は研究の基礎作業であると同時に、所蔵機関における史料保管の台帳にもなり、文化財を散逸なく後世に伝える上で、大切な作業でもある。また、勸修寺文書が重要文化財に指定され、国の文化財として永く保存されることとなったのは、顕著な社会的貢献だといえる。(2)(3)諸分野の研究者により密教修法に関して総合的な研究を行い成果をあげることで、今後の仏教史研究の方向性を示すことができ、また、その公表に向けた準備が整ったことの学術的意義も大きいものがある。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to promote interdisciplinary research by researchers in various fields based on steady empirical research from investigations of historical sources in the base of Shingon Esoteric Buddhism temples, and aim to construct new image of Buddhism history.

The results are the following three points.(1) We have investigated historical sources of base temples, and have made inventories of all the uninvestigated sources. One of the most remarkable results of this research is that Kaju-ji document was designated as an Important Cultural Property in 2017.(2) We have concretely considered how thought, architecture, art, literature, politics, socioeconomics and history intersected, focusing on religious place where ascetic practice of esoteric Buddhism was performed. We also have shown a future direction of Buddhism historical study.

(3) We are ready to publish a book that adopts the results of this research and systematize Shingon Esoteric Buddhism research.

研究分野：日本仏教史

キーワード：日本史 日本思想史 日本仏教史 真言密教史 密教修法 寺院経蔵

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 人文学の分野では研究の個別分散化が進むなか、学際的研究の必要性が叫ばれて久しい。ただ、人文学の基礎となるのは、史資料の着実な調査とその正確な読解に基づく事実の積み上げであることは疑いない。それを基盤として、体系的かつ包括的な枠組や論理を構築し、さらには新たな方法論の提示がいま求められている。かかる認識のもと、本研究では、研究代表者が行ってきた勤修寺・随心院・仁和寺など真言密教拠点寺院における史料調査の成果に基づき、着実な実証研究を進めると同時に、それを基盤として歴史学・仏教学・建築史学・美術史学・国文学の研究者が密教修法という同一のテーマを考察することで、総合的な密教法会論を構築し、その方法を普遍化して、新たな仏教思想史研究の枠組を模索しようとするものである。

(2) 研究代表者により、真言拠点寺院の史料調査は着実に進捗しており、各調査成果に基づく論文も10本近く発表した。これらの基礎的準備を踏まえ、真言密教・同寺院の歴史的解明、寺院経蔵の構造解明、体系的な史料論の構築などの視角から、これまでの調査・研究の成果を総合化・体系化することが求められている。

2. 研究の目的

本研究は、真言密教拠点寺院における史料調査を基盤にした着実な実証的研究を踏まえ、諸分野の研究者による総合的研究を進め、最終的には新たな仏教思想史研究の枠組の構築を目指すものである。具体的には、次の2つの目的を達成する。

(1) 史料調査の成果より、平安期～江戸期を対象に真言密教と真言寺院の歴史的変遷を解明するとともに、諸史料の生成・伝授・保管・廃棄・分類・書写・修補という視座から、経典・聖教・文書などから成る寺院経蔵の全体構造を明らかにし、体系的な史料論を構築する。

(2) 歴史学・仏教学・美術史学・建築史学・国文学の研究者が密教修法という同一のテーマに関する議論を深め、分野を超えた総合的な密教法会論を構築し、それを基盤として新たな仏教思想史研究の枠組に向けた方法論を鍛えていく。

3. 研究の方法

4年の研究期間のうち、最初の2年間は主に基礎的な調査・研究の充実にあてる。つまり、研究代表者を中心に寺院経蔵の調査を進め、悉皆目録を作成し、代表者・分担者は各自の専門領域において密教修法に関わる基礎的な調査・研究を推進する。それらの進捗状況と成果を確認しつつ、課題を深めていく。最後の2年間は調査・研究成果の体系化・総合化の推進に力点を置き、同時に補充調査も実施する。研究代表者は研究の取りまとめを進め、代表者・分担者は着実な実証成果をともなった、新たな仏教思想史研究の構築を目指す問題提起的な議論を展開する。

4. 研究成果

(1) 真言密教法流の拠点寺院の史料調査を行った。個人の研究の関心に従った宝探的な調査は極力避けて、寺院経蔵の全体像の把握に重点を置き、個々の史料の伝授・保管・廃棄・分類・書写・修補の具体的な過程を解明しながら、経蔵の形成・変遷の歴史的過程を考察した。そのため、未調査の史料群については悉皆目録を作成することを第一に進めた。目録の作成については今後も継続的に進めねばならない史料群も存在するが、顕著な成果としては、研究代表者が中心になり作成した勤修寺文書目録に基づき、2017年春に勤修寺文書が国の重要文化財に指定されたことである。また、勤修寺聖教目録も既に完成しており、聖教分についても近々追加指定がなされる予定である。同時に、悉皆目録を作成する過程で、勤修寺大経蔵・慈尊院経蔵の形成・変遷の過程が明らかになり、平安前期から明治期に至る勤修寺の歴史を詳細に把握することができた。これは他の真言密教寺院の経蔵や寺院の歴史を考える上で、ひとつの指標になるものといえる。5年程度の長期的な課題となるが、勤修寺以外で取り組んだ寺院についても同様の成果をあげたいと考える。

(2) 上記(1)の史料調査を踏まえながら、研究課題として特に注目したのが、密教修法が行われた儀礼空間を中心に、思想・建築・絵画・彫刻・文学・社会経済・歴史が交差する様子を具体的に明らかにして、今後の仏教史研究の方向性を示すことである。考察の対象としてとりあげたのは後七日御修法と孔雀経法で、次第書を中心に関連聖教類を読み込むことで、修法が行われる場の設え、建築空間の使われ方、本尊をはじめとする絵画の配置、大壇や他壇の上に置かれた法具等の配置、大阿闍梨・伴僧の所作、後夜・日中・初夜の所作の差異などを明らかにして、それぞれが持つ思想的意義を考察した。新たに解明した事実は多いが、そのなかで注目すべき点をひとつあげると次の通りである。

通常、密教修法は大阿闍梨が本尊の前で真言や陀羅尼を唱えながら、結印などの所作をおこない、所願の成就を祈念するものとされている。しかしながら、孔雀経法や請雨経法など大法と呼ばれる大規模かつ重要な修法では、読経がなされている。しかも、大法で読経が行われないのは後七日御修法(最勝王経法)のみで、これは同時に宮中で行われている御齋会で金光明最勝王経が唱えられているからである。つまり、後七日御修法を創始した空海は、御齋会をもその一部に取り込んだ修法として後七日御修法を構想したのである。かかる後七日御修法の構成は九頭十密などと表現される空海の密教思想のあり方とも合致するものといえる。

(3) 研究代表者が行ってきた真言密教研究を踏まえて、他分野の研究者との共同研究によって得

られた上記(1)(2)の成果を取り込み、それらを体系化した書籍を刊行する準備ができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 18 件)

上島享 (Trans.by Lindsey E.DeWitt)、Kami and Buddhism in the No Miwa:Rethinking the Study of the Amalgamation of Kami and Buddhas(shinbutsu shugo)、単著、Japanese Religions (NCC Center for the Study of Japanese Religions)、査読有り、Vol42-1,2、2018、pp25-38

上島享、中世仏教の成立とその特質、単著、大久保良竣編『日本仏教の展開』(春秋社) 査読無、2018、pp103-126

菟輪顕量、南都の戒律 中世の復興から現代を考える、単著、楠淳證編『南都学・北嶺学の世界』(法蔵館) 査読無、2018、pp166-187

菟輪顕量、学問と修行から見た中世仏教、単著、大久保良竣編『日本仏教の展開』(春秋社) 査読無、2018、pp127-165

菟輪顕量、日本古代における『大般若経』の受容、単著、栄原永遠男・佐藤信・吉川真司編『東大寺の新研究 東大寺の思想と文化』(法蔵館) 査読有、2018、pp71-94

佐藤愛弓、験者の肖像 余慶とその弟子たち、単著、『山辺道』、査読有、58号、2018、p45-77

上島享、中世真言寺院の教学とその歴史的変遷 根来寺の位置づけを考えるために、単著、山岸常人編『歴史のなかの根来寺』(勉誠出版) 査読無、2017、pp195-209

佐藤愛弓、学僧たちの説話 三修魔往生譚について、単著、『山辺道』57号、2017、pp1-33

上島享、『源氏物語』が書かれた時代を考える、単著、紫式部学会編『むらさき』、査読無、53号、2016、pp83-87

上島享、『国内神名帳』の成立、単著、『神道史研究』、査読有、2016、pp2-35

菟輪顕量、中世法相宗における理の理解、単著、『三友健容博士古稀記念論集 智慧のともしび アビダルマ佛教の展開 中国・朝鮮半島・日本篇』(山喜房仏書林) 査読無、2016、pp271-288

菟輪顕量、日本仏教における継承と伝統、単著、『浄土真宗総合研究』、査読無、10巻、2016、pp13-30

菟輪顕量、止観研究の歴史とその現代的意義、単著、『印度学仏教学研究』、査読有、65巻1号、2016、pp1-10

佐藤愛弓、『真言伝』における神仏習合 山中で出会う美女、単著、京都仏教説話研究会編『説話の中の僧たち』(新典社選書)、査読無、2016、pp125-160

皿井舞、鳳凰堂須弥壇の美術的研究、単著、東京文化財研究所・平等院編『平等院鳳凰堂内光学調査報告書』、査読無、2016、pp50-75

山岸常人、神社建築の形成過程、単著、『史林』、査読有、2015、pp1-33

菟輪顕量、良忍の念仏、単著、『融通念仏宗における信仰と教義の邂逅』(法蔵館) 査読無、2015、pp12-19

菟輪顕量、The Development and Significance of Meditation in Buddhism, Dharma World; For Living Buddhism and Interfaith Dialogue, Features、The Modern Significance of Meditative Practices in Religions (Rissho kosei-kai) 査読無、2015、Vol. 42 : pp12-19

〔学会発表〕(計 19 件)

上島享、密教修法の構成・特質と中世社会 孔雀経法を通して、International Symposium: Medieval Japanese Buddhist Practices and Their Visual Art Expressions (日本仏教の展開とその造形)(ハーバード大学ライシャワー研究所) 2019、招待講演、国際学会

菟輪顕量、中世における仏身論の展開、Foreign Scholars Invitation Conference of Department of Philosophy, Seminar Hall, Humanities Building, Chonnam National University, South Korea, 2019、招待講演、国際学会

菟輪顕量、東アジアにおける仏教研究の動向、ワインスタイン教授追悼国際シンポジウム「東アジア仏教研究のあけぼの」(駒沢大学中央講堂) 2018、招待講演、国際学会

菟輪顕量、大乘仏教非仏説論争、東京大学文学部印度哲学講座 101 周年記念シンポジウム「日本近現代仏教学 論争から見る仏教研究」 2018、招待講演

皿井舞、The Style and Techniques of Dry Lacquer Sculptures in Japan: The Latest Scientific Report About the Seated Senju Kannon Bosatsu of Fujiidera, Sixth Forbes Symposium at the Freer Gallery of Art, 2018、招待講演、国際学会

上島享、密教修法の歴史的変遷と孔雀経法、日本仏教総合研究学会第 1 回例会(東京大学史料編纂所) 2017、招待講演

上島享、神仏習合研究を問い直す、国際シンポジウム「仏教の両翼を世界に探る」(早稲田

大学)、2017、招待講演、国際学会

上島享、神仏習合を再考する、2017年度読史会大会(京都大学)、2017、招待講演

上島享、神勸請儀礼の歴史の変遷 インド・中国・日本、仏教史学会シンポジウム「日本とアジアの神仏の融合の諸相」(名古屋市立大学)、2017、招待講演

上島享、草創期の京都帝国大学国史学の特質、公開シンポジウム「史学科の比較史 草創期から1945年」(立教大学)、2017、招待講演

蓑輪顕量、日本中世における仏身論の展開、日本印度学仏教学会大会、2017、招待講演

蓑輪顕量、Acceptance of Mindfulness in Medieval Japan, focusing on the Hossō and Zen sects, International Symposium, Exploring the two wings of Buddhism in the World(2) Buddhist cultural practices across Asia, Hosted by the University of Naples, "L'Orientale" and Lucia Dolce (SOAS, University of London)、2017、招待講演、国際学会

皿井舞、平安時代における和様彫刻の成立について、International Conference: Constructing Identity. The Patterns of Japanese Culture、2017、招待講演、国際学会

上島享、古代・中世における論義法会の歴史の変遷とその意義 朝廷と南都・北嶺の論義法会、国内シンポジウム「南都学・北嶺学の構築に向けて 論義と儀礼」(龍谷大学)、2016、招待講演

蓑輪顕量、中世初期の仏教界に見る学問と修行、駒沢大学仏教学会平成28年度年次大会公開講演会(駒沢大学)、2016、招待講演

上島享、日本中世神祇秩序の形成 その再考、第61回神道史学会大会(皇学館大学)、2015、招待講演

上島享、西行が生きた時代の宗教と社会 勸進活動を通して、第7回西行学会大会(兵庫県民会館)、2015、招待講演

上島享、密教修法の構成と空海の後七日御修法の創始、国際研究集会「法会と空間」(京都大学)、2015、国際学会

皿井舞、仁和寺阿彌陀堂三尊像と宇多天皇の信仰、第49回オープンレクチャー(東京文化財研究所)、2015、招待講演

〔図書〕(計2件)

増記隆介・皿井舞・佐々木守俊、『天皇の美術史 古代国家と仏教美術』(吉川弘文館)、2018、総頁252

蓑輪顕量、『日本仏教史』(春秋社)、2015、総頁261、ISBN 9784393138014

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名: 山岸 常人

ローマ字氏名:(YAMAGISHI, tsuneto)

所属研究機関名: 京都府立大学

部局名: 文学部

職名: 特任教授

研究者番号(8桁): 00142018

研究分担者氏名: 蓑輪 顕量

ローマ字氏名:(MINOWA, kenryou)

所属研究機関名: 東京大学

部局名: 大学院人文社会系研究科(文学部)

職名: 教授

研究者番号(8桁): 30261134

研究分担者氏名：佐藤 愛弓
ローマ字氏名：(SATO, ayumi)
所属研究機関名：天理大学
部局名：文学部
職名：准教授
研究者番号 (8 桁) : 50460655

研究分担者氏名：皿井 舞
ローマ字氏名：(SARAI, Mai)
所属研究機関名：独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館
部局名：学芸研究部
職名：主任研究員
研究者番号 (8 桁) : 80392546

(2)研究協力者 なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。